

進退動クコトカタキ場所ナリ、中國四國モ半バ此所ヨリノ取締ニカ、ルベシ、夫レニ兵庫大坂堺等ニテ取締ルモノナラバ、嚴重ナルベシ、亂世トナリタラバ、必ズ下ノ關ハ九州ノ咽ニテ要所ナルベシ、トノ御話アラセラレシ由、其時分、心アル者ハ御卓見ヲ感ゼシコトナリキ、之レ安政四年夏ゴロノ御話ナリ

秀吉ガ信長ニ仕へ、家康ガ秀吉ニ仕へタル、大慮ナリト

ノ御話(江夏ヨリ承ル)

或ル時、江夏十郎御前へ罷り出デ候節、川内新田宮所藏ノ文書類御覽央ニテ、秀吉川内陣ノ御話ニ、秀吉ト信長ト比スレバ、秀吉遙カニ智慮勝レタルハ素ヨリニシテ、秀吉ガ信長ニ仕へタルハ、信長ヲ仕ハントノ心ナリシハ明ナリ、信長ハ家柄ニテ自然備ハル處ノ勢ト智慮アリ、秀吉ハ賤シキヨリ取り上リ、信長ノ性質ヲヨク見抜イテ奉公シタリ、之レヲ考フレバ、信長ノ智慮ニ勝リタルハ十倍ナリ、又家康秀吉ノ處ハ性質大ニ異ナリテ、火ト水トノ如シ、素ヨリソノ時ノ勢ヒ、秀吉ハ天下ニ威勢ヲ張りタル故、家康ヨク其勢ヲ考ヘテ仕へタル者ナリ、智慮ハ二ツナガラ品コソ替レミナ能ク

備リタル人ナリ、此後モ騷シキ世トナリタレバ、秀吉家康如キノ人出ルナルベシ、人物ハ亂世ニ出ルモノナリ、二百年來ノ泰平ハ、信長ニ出デ、天子ヲ尊ビ、秀吉家康共ニ天子ヲ敬ヒタリ、夫ヨリシテ久シキ亂世一統飽ハテ、治世トナリタルモノナリ、此二百年餘ノ泰平ハ信長ニ起リ秀吉ニ張り家康ニ整ヒタリトノ御話アラセラレシ由

水戸侯越前侯ノ御話(中原尙介ヨリ承ル)

中原尙介ハ江川太郎左衛門ガ塾ニアリテ、専ラ西洋砲術修業仕リ候ニツキ、田町御邸内へ砲臺御建築ノ取調方江川へ依頼取調ブベキ旨奉命、建築場繩張等ノ爲メ江川御邸へ罷り出デ候節、御逢ヒニ相成リ、彼是御懇叮ノ御沙汰アラセラレ、其節、水戸越前等ノ書生モ江川召列レ罷り出デ候由、其後、中原へ御沙汰ノ趣ハ、水戸ハ、今ニ西洋式ヲ全ク用ユル場ニハ至ラズ、舊流ニ凝リタルモノモアル由、アレ程ノ人が如何ナル心得ニテ國中一般ノ備ニ用ユルノ決斷ナキヤ、江川ニハ何ト申スヤ、トノ御尋ニツキ、御沙汰ノ通り、江川ニモ、名望アル水戸侯ニシテ御開悟ナキヨリ全國ニ及ボス一般ノ兵制ニモ關係仕ル旨常ニ嘆息罷り在リ候段、言上候處、御沙汰ニ、存ジノ通り、元來、

砲術ハ舶來ニテ、日本發明ノモノニアラズ、天文ノコロハ麻ノ如クニ亂レタル世ナル故、直ニ實用ニ試ミ、利器ナルヲ以テ、日本中ニ弘リタリ、夫ヨリ日本ニテ流派ヲ立テタルモノナリ、日本ニテ大小砲トモニ實戰ニ用ヒシハ、西洋ニ比スレバ僅カナルコトナリ、今時ノ諸流ハミナ治世以來ノモノニテ、座上ノ論ナリ、西洋ニテハ數百年絶エズ實場ニ試験シ、種々發明或ハ改革シテ、今日ノ盛ナルニ至レリ、然レバ、其宜シキニ從ヒ、斟酌シ、軍備トスベキニ、水戸殿程ノ人ガ心付カレザルニモアルマジク、越前トテモ同様ナリ、今此ノ兩家ハ人望モアリ、殊ニ家門ノ分トシテ、天下ノ事ニハ心配セラルナルベシ、今ノ次第ニテハ外國防禦ノ備ニハナルマジク、今ノ世トナリテハ日本一體一致ノ兵備ニアラザレバ、外國ニ對當スルコト叶フマジク、公義モ諸大名モ是レマデ一國一郡位ノ心得ニテハ、日本國ノ守護ハ調フマジク、此内、亞米利加ガ獻上ノ本込銃ハ、公義ニ祕シテ、外ニ出スコトモ禁ジタリト聞及ベリ、寔ニ笑フベキ仕方ナリ、近年中、諸大名ノ内ニ必ズ手ニ入ルモノアルベシ、一流一派ノ祕傳ノ弊ト同ジキナリ、此事ハ江川ナド如何心得タリヤ、日本一致一體トナリ、器械モ何モ一樣ノ良器備リテコソ、本途ノ防禦調フベシ、此方ノ考ヘハ、良キ器械ニテモ手ニ入りタ

ラバ、速ク諸大名ヘ相達シ、製造サスル様ニシ、日本中一致シテ、外國ノ備ニナシタキコト、思ヘリ、然ルトキハ、將軍家ノ御職掌ニ適ヒ、天子ヘノ御忠義ナラン、水戸越前其外三家ニモ、其心得ニ成リテ手當アリタキコトナリ、此ノ趣ヲ江川ヘ申聞ケヨ、何ント謂フ乎、其返詞ヲ知ラセヨトノ趣、拜承仕リ、中原感激シ、後日、右ノ趣、江川ヘ申聞ケ候處、感服シ、實ニ一言モコレ無ク、豫テ御明敏御穎邁ノ段ハ傳聞仕リ罷リ在リシガ、斯マデノ御言ハ初メテ相親ヒ、身ニ針セラル、トハ此事ナリ、一人ニテ承ルベキ事柄ニアラズ、トテ、水戸越前ノ書生ヲ一席ニ呼出シ、右御沙汰ノ趣反復申聞ケ、各君公又ハ重役方ヘモ申入ラレヨ、實ニ方今ハ薩侯ノ御説通りノ御所置ニ基キ、海内一致一體トナラザレバ、外夷ニ當リ皇國ノ威武ヲ輝スコト能ハザルナリ、憂君憂國ノ人ハ、薩侯ノ格言循守セズンバアルベカラズ、自分ニハ閣老又ハ其筋ヘ屹ト申入ル心得ナリ、斯ル世態ニ變遷シタル上ハ、從來ノ如ク一國一郡ノ狹隘ナル一流一派ニ等シキ手當ハ、皇國ノ軍備ト謂フモノニアラズ、薩侯ハ明敏ナリ忠誠ナリ、間然スルコトナキ英君ナリ、塾中ミナ此ノ説ヲ申シ傳ラレヨ、感激シテ申聞ケタリト、又曰ク、事ニ臨ンデハ、公ヲ元帥ト仰ギ、皇國ヲ守護セン、ト感嘆獨言セリ、(此語、江川感激

ノ餘リニヤ、前後ヲワスレ、獨言セリトゾ、中原其席ニ在リテ、誠ニ榮譽ヲ極メタリ、水越藩其他各藩ノ書生之ヲ聞イテ感激シ、或ハ慷慨扼腕スル者モアリシトゾ

「ナポレオン」「ワシントン」ガ御話（井上ヨリ承ル）

佛郎西ノ「ナポレオン」、亜米利加ノ「ワシントン」、一代記御讀セ、御聞遊バサレ候際ノ御話ニ、「ナポレオン」ハ、日本ニテ秀吉ト比較スル人物ナリ、「ワシントン」ニ比スル人物、日本ニハナシト思ヘリ、「ナポレオン」ハ秀吉ニ比シテ材略勇智の當ナリ、終ヲ全フシタルハ秀吉ノ方優ルガ如シ、日本ニモカレニ比スル人物アリシハ、此小國ニ誇ルベキコトナリ、「ワシントン」ハ智勇兼備賢人ト言フベシ、世界中比スル人物ハ多カラザルベシ、此人ニ比スル日本ノ人物、誰ヲ以テ的當トスルヤ、心アル者ヘ文ニ作りテ出サスベシ、トノ趣、井上庄太郎へ御沙汰アラセラレ候由、（造士館員ノ中ニ、漢文ヲ作り奉呈シタル者多シ）

正成義貞ノ御話（後醍醐ヨリ承ル）

後醍醐彦次郎ハ國學ニ達シ和歌モヨクセリ、國典上ノ取調或ハ御尋ニナリシ事寡カラズ、或時、侍醫川畑魯水ヲ以テ、南朝ノ忠臣ハ誰モ正成義貞ト唱フ、ソノ外ニモ忠良ノ人多シ、其中ニ正成ハ忠誠天地ヲ貫キ南朝ノ一人ナリ、軍事ノミナラズ、政事ニ取リテハ軍事ヨリ一層長ジタル人ナルベシ、其譯ハ人心ヲ治ルコト、彼ノ亂レタル時節ニコレ程ノ人ナシ、臣下ニハ恩地如キ人物多カリシナラン、日本ニテ中古以來ニハ正成ニ比スル人アラザルベシ、義貞ハ智勇兼備ノ人ニテ、軍事ハ上手ナレドモ、軍ノミノ達人ナリ、政事ニオイテハ何ノ説アルコトナシ、考フルニ、南朝ニテハ正成ヲ人物ノ第一トシ、次ニハ兒島高德ナリ、藤房ハ其次ナルベシ、義貞ハ一ツノ武將ト唱ヘテ可ナラン歟、後醍醐ハ如何ガ心得ルヤ、南朝ノ忠臣ニ順序ヲ立テ、見込ヲ記シ見セヨ、トノ御沙汰アラセラレ、命ノ如ク論説ヲ作り奉呈セシコトコレ有リ候、後醍醐モ、正成ニ政事ヲ執ラシメンコトヲ望ムノ私考、或ハ南朝數代吉野山中ニ皇居ヲ置レシハ正成程ノ人物アルニ内外ノ政務ヲ執ラシメザルニ起レル趣ヲ痛論シタル一篇ナリキ（造士館員其他和漢文奉呈セシ者多カリシト云フ）

既往ノ事ヲ鑑テ前途ノ事ヲ工夫スルトノ御話（江夏ヨリ

承ル）

磯御邸御滞在中、（安政四年ノ夏）、少シ御不例ニアラセラレ候時分、江夏十郎伺ヒゴトアリテ罷リ出デ、伺ヒ中ニ、不圖、御沙汰ニ、大信院様御在世中、種々御創造、或ハ御改革遊バサレ、且ツ造士館演武館明時館等、盛ニ御取建相成リ、御隠居後、秩父ナドガ不都合イタルヲ御立腹遊バサレ、白金様（齊宣公）御隠居、高輪様（齊興公）御相續御介助ノ御願ヒ相成リタル始末、委シク存ジ居リ候ヤ、トノ御尋ニツキ、江夏御答ヘニ、大信院様ニハ纔三四年ノ間相勤メ、若年ノ時ニテ、ソノ邊ノ事ヨク承知モ仕ラザル旨申上ゲ候處、御沙汰ニ、大信院様ニハ、御英邁ニテ、何事モ意表ニ出ルコトヲ遊バサレ、今時ニモ御在世ナラバ、格別ナル御見込モ付セラルベシ、御事蹟ヲ考フルニ、非常ノ世ニアラザルガ故、御存分ノ御事ハ得成レザルナラン、是等既往ノ事ヲ鑑テ前途ノ工夫ニ渉ル趣意ナリ、トノ御事ナリシ由、之レハ如何様深キ御勘考ノ譯アラセラレテノ御話シナラン、何カ御配慮中ノ御事故カ、ト江夏モ推量奉リ候由

勇斷ナキ人ハ事ヲ爲スコト能ハズトノ御話（江夏ヨリ承ル）

嘉永ノ末安政ノ初メニ至リテ、外國船屢渡來、通信貿易ヲ請フ、ソノ勢ヒ甚ダ猖獗、天下騒然、物議紛紛、幕府維持ニ苦ム、茲ヲ以テ諸大名へ見込ノ建言ヲ令シ、或ハ御カニ海防ノ策ヲ著ハスモノ多シ、ソノ際、中原尙介ヨリ、各藩侯及ビ有志者ノ建白或ハ論說等ヲ輯録シタル海防彙議ト題スル書一部ヲ送り遣ハシ候ニツキ、江夏十郎ヨリ尊覽ニ入レ候處、ソノ後ノ御沙汰ニ、一ト通り讀タルニ、左マデ良策ト驚ク程ノ說モナシ、悉ク姑息苟安ノ論、或ハ偏僻、或ハ迂論ニシテ、英斷目ヲ醒ス程ノ文ナシ、然レバ人物ハ少キモノナリ、此ノ様、數ヶ國ヨリ通信ヲ乞フテ、和蘭ノ外皆暴威ヲ以テ迫リ乞フノ際、姑息苟安ノ策ニテハ、迎モ日本ハ保タレマジク、誠ニ歎カシキ次第ナリ、非常ノ果斷ヲ以テ、内外ノ處分ヲ變ゼザレバ、保ツコト難カルベシ、要路ニ立ツ人、非常ノ人物ヲ登庸シ、非常ノ措置ヲナスベキノ時ナリ、勇斷ナキ人ハ事ヲ爲スコト能ハザルナリ、治亂共ニ勇斷ナキ人ハ用ニ立タザルナリ、トノ御沙汰アラセラレ、御勇奮ノ御様子ニ伺ハレシトゾ*

* 島津齊彬は盲目的な勇氣ではなく、理知的なる近代的勇氣の意義を考へて居たのである。さ

れば齊彬は、「只今異人の事實に暗く、血氣無謀の面々の申立て、また浪人等立身の爲に申すやからも少からざる」が如き「無謀の大和たましひの議論」を用ふることは、「以の外の事」とし、「さてきて歎くべき事」とした。(照國公文書、卷二、安政五年四月九日早川兼壽ニ與フル書、安政五年四月十一日宇和島侯ニ與フル書)。そして當時當局が國際情勢を國民に秘して居た態度は實は卑怯の恐怖であるとして、齊彬は次のやうに云つて居た、「此節異船の儀、とかく御秘しに相成り候、人氣の動亂を老中共恐れ候故にもこれあるべく候へども、あまり御祕事過ぎ候へば、なほさら人々疑念を起し、少事をも大事に申しふらし候わけにござ候、日本に生れ候ものは一人として皇國をあしかれと存じ候ものはこれ無き事ゆへ、此度の如き儀、御秘しに及ばず、委しく仰せ聞けられ、存じよりの御尋もござ候て、御評決に相成り候へば、人心一和の基にも相成るべく、當時のごとく御祕事ばかりにては、如何ほどの御良策にても、人心疑惑仕るべきは必定に存じ奉り候」(照國公文書、卷一、嘉永六年七月十日水戸老侯ニ與フル書、別啓)。

一癖アル者ニアラザレバ用ニ立タズトノ御話 (江夏ヨリ)

承ル)

海防建白中ニ、安井忠平ガ説ニ、人材登用ハ方今ノ急務ナリトノ論、或ハ其人材モ、

十人ガ十人百人ガ百人好ム處ノ人ニ人物ハ絶テナキノミナラズ、古今少ナシトス、人材ハ必ず一癖アルモノノ中ニ撰ブベシトノ論ハ、今ノ形勢ニハ至當ナリ、我モ同様ニ思ヘリ、今ノ老中ヲ初メ役人中、ミナ姑息ノ人物ニテ、非常ノ世ニ處スル人ハ一人モナシ、十人好キノ人ハ用ニ立ツモノニアラズ、馬モ乗り僻ノモノニアラザレバ、實場ノ用ニハ堪ヘザルナリ、乗僻者ヨク乗り付ル人又少キモノナリ、人ヲ仕フハ同様ナリ、トノ御話アラセラレ候由

義弘公ハ軍事ハ勿論經濟ニ御心ヲ用ヒラル、厚カリシトノ御話

或時、重久玄碩、古帖佐燒ノ陶器(文祿年中朝鮮ノ役ニ義弘公朝鮮人數十名ヲ召列レ御歸朝、帖佐郷ノ内ニ召シ置レ、陶器製造命ゼラレタリ、之レヲ古帖佐製ト珍重ス)ヲ御覽ニ入レ奉リ候處、御意ニ叶ヒタル器物ニテ、御覽遊バサレ候折カラ、三原藤五郎罷リ出デ、是レ見ヨトノ御沙汰アラセラレ、其節ノ御話ニ、之ハ古帖佐ノ上品ナリ、夫ニ就テ思フニ、義弘公ハ軍ノ御上手ハ勿論ナルガ、經濟ニ御心ヲ用ヒラル、ノ厚カ

リシコトハ、人ノ謂ハザル處ナリ、朝鮮ヨリ燒物スル者ヲ御召列レニ相成リ、帖佐ノ御城下ニ召置レ、御燒セ成サレタル由、則チ此等ノ品ナルベシ、夫ヨリシテ燒物開ケタリ、今ノ苗代川暨野燒等ノ製ナリ、加藤清正モアレ程ノ人ニテ、同様列レ歸リ、肥後ニ開キタル由、其上義弘公ハ加治木ニオイテ通寶モ御鑄立ナサレタル由、(慶長年中、義弘公加治木御在城ノコロ、同地ニオイテ鑄錢セラレシコト、舊史ニ記スルガ如シ、錢形チ洪武通寶ニ擬シ、裏面ニ加ノ字一ツヲ記セルト云)、之ヲ以テ見レバ、經濟ニ御心ヲ用ヒラル、ノ厚カリシコト知レタリトノ御話遊バサレシ由、如何ニモ御沙汰ノ通、軍事ハ勿論、經濟ニ御注意ノ程感服仕リ候ト、三原ヨリ承リ候、(朝鮮人ヲ伊集院苗代川ニ移サレタルハ慶長八年癸卯ノ冬ナリ)

十四五年ノ後ハ三ヶ國ヲ日本一ノ富國ト爲サントノ御話
(三原ヨリ承ル)

三原藤五郎ハ當時御趣法方掛ナリ、(御趣法方ハ財政御改革ノ爲メ、天明ノ末、創設セラレタル局名ナリ)、或ル時、勸農方ノ儀伺ヒノ事アリテ罷リ出デ、其節御沙汰ニハ、

經濟ノ根本ハ勸農ナリ、人間生活ノ基ナリ、世ノ中ニ農業ニカ、ラザルハ何モナシ、依テ古人モ國ノ本ハ農トコソ言ヘリ、勸農ハ政事ノ本ナリ、故ニ御先代様ヨリ御吉書ニモ、(吉書トハ、年首ノ御式中貴重ノ一式ナリ、其文中、神社佛閣修造又ハ勸農ノ文アリ)、勸農ノ事ヲ記ス規則御立ナサレタリ、勸農ノ儀ハ一涯手厚ク心掛ネバ相濟マザルナリ、明暮レ考フル處ハ、今ヨリ十四五年モ分ケテ心配シタラバ、日本一ノ富饒ト謂フ様ニ爲スノ心得ナリ、金銀ヲ何ホド積ムトモ之レハ限りアル者ニテ、飢ヲ凌グベキモノニアラズ、農ハ其時節ヲ失ハズ植付ルトキハ、年々生々シテ、無盡藏ナルハ土地ヨリ外ナシ、如何ナル天災ニモ如何様ノ變アリテモ、穀類ト鹽トノ二ツアレバ國中飢ルコトハ決シテナシ、トノ趣、御沙汰アラセラレ候由(三原ヨリ親シク承リ候)

天下ノ政一變セザレバ外國ト交ヲナスコト能ハズトノ御話
(江夏ヨリ承ル)

安政五年ノ春ヨリ夏ニ至リテ天下益騒然、幕府措置ニ苦ミ、各藩ニハ有志勃興シ、物議擾々歸着ノ途ナシ、中原尙介、江戸ニアリテハ、豫テ奉命ノ趣モアリシ故、幕府及

ビ各藩ノ情實、外夷ノ舉動等詳カニ江夏十郎へ報知イタシ、江夏之ヲ御覽ニ入レ奉リ候處、繰返シ御覽遊バサレ、御憂歎ノ御様子顯レ、御沙汰ノ趣ニ、此様内外ノ混雜一時ニ差起リタル上ハ、斷然天下ノ政事向ヲ一變シ、第一人心ヲ纏メ、本ヲ据テ、而シテ外國ノ取扱ヒ爲スニ目的ヲ變ゼザレバ、皇威ヲ外國ニ輝スコト能ハザルベシ、天下ノ政事一變ノコトハ、昨年下國前ヨリ決心シタリ、此上ハ急イデ事ヲナスニアリトノ御沙汰アラセラレ候ニツキ、江夏言上シケルハ、天下ノ政事御一變トノ御事ハ、寛猛ノ二ツニ極リタル歟ト存ジ奉リ候、其御手順ハ如何思召シ上ゲラレ候哉ト申上ゲ候處、其事ナリ、昨春マデハ成丈寛ナルヲ主トシタレドモ、兎角變ジテ猛ニ先ンズルニ外ナシ、此上ハ京都ノ御都合ヲ窺ヒ奉リ、叡慮ノ在ル處ヲ日本中ニ知ラシメ、人心ヲ一致シ、臨機ノ處分スル心得ナリ、遠カラズ決心ノ次第申聞ル様ニスベシトテ、大イニ御案ジノ御様子ニ窺ハレタリトゾ、江夏ニモ甚ダ心配シテ、右ノ趣、窃ニ清水源兵衛磯永喜之助等へ申聞ケ候由、コレ安政五年戊午六月末ゴロノ事ナリシトゾ

國政ノ成就ハ衣食ニ窮民ナキニアリ、此ノ事ニ心配スト

ノ御話（江夏ヨリ承ル）

安政五年ノ夏ニ至リテ天下益騒擾ノ勢ヒ顯レ、追々京都江戸ノ形況聞召シ上ゲラレ、御憂慮ノ御話毎々アラセラル、或ル時ノ御話ニ、天下ノ政態モ大變革ヲナサマレバ叶ハザル場ニ立到リタリ、此上ハ内外多忙ニテ、一朝一夕ニ成就スベシトモ思ハレズ、國中ノ政事モ改革セザレバ相濟マズ、殊ニ明暮心配ナルハ末々衣食ニ窮スル者ナキ様速ク取計ヒ遣ハシタク、否ラザレバ萬一時ニ臨ンデ氣ノ毒ナル譯ナリ、先ヅ差向キ國政ノ成就ハ此ノ事ナリ、世ノ亂ル、ニ從テ、國中ニ窮民アリテハ、天下ノ政事ニ口ヲ容ル、コトモ調ハザルノミナラズ、外聞ニモ拘ハリ、言ノ行ハレガタキ基ナリ、トノ御沙汰アラセラレ、勸農ト武備ヲ嚴ニスルヲ急務トスルニアリトノ御沙汰アラセラレ候由、コレ安政五年戊午ノ夏、御逝去十餘日前ノ御事ナリシトゾ

○江戸芝御邸外御庭ニ、大ナル築山アリテ、四方ノ詠メ極リナシ、北ハ東叡山御城ヲ限リ、南ハ芝海ノ外安房上總ヲ茫々ト望ミ、東ハ筑波山、西ハ富士山ヲ仰ギ、區街ハ眼下ニアル高臺ナリ、是ヲ御山ト唱フ、齊彬公御部屋栖ノコロ、御弓御稽古濟ミ御引取掛、御山ニ上ルトノ御沙汰ニテ、種子島直太郎（後、次郎右衛門ト稱ス）御先立ニ

テ、御登リ遊バサレ、四方ヲ御詠メアリテ、嗟呼、直太郎、我が此邸ニテハ我ノ屋敷ニハ程小サクシテ面白カラズ、我家督シタル上ハ、直ニ此邊ハ織田遠山壹岐内藤土佐中邸其他ミナ買入レ、一ツニ取廣メ、訓練場ヲ構ヘ置クノ心得ナリ、ト御話アルヲ、富田覺太郎（今、東作ト稱ス）、御腰物ヲ上御跡ニツケ上セ奉リテ承リ、如何ニモ廣大ナル思シメシナリト恐怖シテ居タリ、ト覺太郎今ニ人ニ語レリ

○年月ハ悉皆覺エズ、亞米利加「ヘルリ」浦賀ヘ入港ノ後、御登城、御歸殿、御入浴ノ際、重久玄碩御風呂ヲ上ゲケルニ、玄碩、今日ハ阿部伊勢守ニ逢ヒ取レリ、依テ、西洋各國ハ一般ソノ國章ヲ用ヒ、船印ニ皆國章ヲ掲ゲテ我國ヲ分明ス、今日日本ニオイテ、只諸大名一家ノ船印ハアレドモ、日本ノ國章ナシ、是ハ外國ニ耻ベキコトナラズヤト言ヒケルニ、伊勢守云、實ニ然リ、之ヲ如何ンセント云フ、故ニ、日本國ナル日ノ丸ヲ國章トシ、軍旗船章トモ御用ヒアリテ可ナラント云ヒシニ、伊勢守膝ヲタ、キテ感承セリ、必ズ日章ヲ日本國一般ノ國章トシ、布告アルベキナリト云ヘリ云々ノ御沙汰アルヲ、井上新右衛門、御召上げニ詰居テ、承リ居レリ、ト新右衛門富田覺太郎ニ語リタリト云フ

五 之 卷

○御青年ノ時、早川五郎兵衛、鼻紙入ノ外套、新流行ノ五郎幅ヲ以テ巧ミナルモノヲ製シ持チケルヲ、御覽遊バサレ候テ、御誂ヘ遊バサレタク思シメシ、富田覺太郎（奥御小姓御道具掛）御藏ニアル結構ナル織物ヲ御出サセ、袋物屋鳥羽屋ヘ早々御誂ヘ相成リ、出來上リ、五郎兵衛品ヨリ宜キト御自慢ニ御翫ビ、御鼻紙臺ノ上ニ御載セ置遊バサレタルヲ、福崎助七（御側役、元御守役）御日揚（日揚ゲトハ昨今ノ諸事言上或ハ伺事ノ通語ナリ）ニ罷リ出デ、右ノ御鼻紙袋ヲ拜見シテ、此御品ハ何等ノ御品ナルト問ヒ奉リシニ、新シク拵ヘサセタリト御答ヘ遊バサレシニ、助七申上ルニハ、ケ様ノ品ハ下卑タル者ノ物數寄ニスル道具ニテ、決シテ御大名方ノ御道具等ニ遊バサルベキモノニコレ無クト諷シ奉レリシヲ聞召サレ、即座ニ中村始ヲ召シテ、此鼻紙入ハ拵ヘタレドモ不用ナリ、其方ニ遣ハスト御棄遊バサレタリ、ト富田覺太郎ハソノ時親シク承リ居、只今御誂出來シテ、御樂アルニ、一言ノ諷諫ヲ速カニ御聽入レ、忽チ御捨テ遊バサレシハ、實ニ感佩シ奉レリト語レリ

○賢章院君御遺詩、并、齊彬公治五郎君御追悼ノ御歌

此兩家ノ内ニ今ニ藏セリト思フ

大慈院公御一周忌

秋懷舊

ませしよのその言の葉を思ひ出て

涙はたえぬ秋の夕ぐれ

齊 彬

御文下サレ、忝ク拜見イタシ候、當年ハ別テ不順ノ事候ヘ共、イヨク御障リナク、目出度存上マイラセ候、當地ニテモ例年ヨリハ冷氣多、不順ノ事ニ御坐候、去ル二十三日地震御坐候由、當地ハトント地震ハ御坐ナク候、扱暑中ニ付、何ヨリノ品下サレ、忝ク存上マイラセ候、當地ヨリ何ゾト存候得共、當年ハイマダ琉船モ參ラズ、諸品拂底ニ付、存付ノ品モコレ無ク、在合ノ品態ト御目ニ懸マイラセ候、扱亦御存ノ通、先年ノ不快後養生ノ爲着後早速磯江參リ、温泉取寄セ入湯イタシ候處、手足

元尊 折田清之進
同 成尾 清次

其外江殊ノ外吹出モノイタシ候ニ付、幸ノ事故、折角追出シ候手當イタシ、イマダ手ナドニハ膏藥付居候間、此節ハ何分筆取カネ候マ、代筆ニテ申上候、尤モ持病ノ方ハヨロシク相成リ候事ニ御坐候、先日中ヨリ吹出モノ誠ニウルサク、込リ入申候、仰下サレ候事、何モ承知イタシマイラセ候、委シキ御返事ハ、其内直書ヲ以テ申上グベク候、メデタクカシク

尙々時候御イトキナサルベク候、メデタクカシク

於ミチ殿

智鐘院殿

於カツ殿

晴雲院殿

* 原本こゝに朱筆にて「安政四年六七月頃」と書入れてある。以下、同じ。

御文下サレ拜見申上候、トカク不順ノ事ニ御坐候得共、マス御機嫌ヨク入ラセラレ、御目出度存上マイラセ候、當地ニテモ當年ハ珍シク冷氣相交リ不順ニ御坐候、

サテ暑中カタガタ御尋下サレ、何寄ノ御品々下サレ、難有存上マイラセ候、當地ヨリモ何ゾ上ゲ度存候得共、琉船モ未ダ着致サズ、品物拂底候ニ付、決付ノ品モコレ無ク、在合ノ品ワザト進上イタシマイラセ候、扱私ニモ不快後養生ノ爲メ磯江參リ溫泉入湯イタシ候處、手足其外吹出モノイタシ誠ニウルサクシカシ持病ニハヨロシク候間、折角追出シ申候、此節ハ最早ヨホド宜シク候得共、未ダ筆取カネ申候マ、代筆ヲ以テ申上候、委シキコトハ其内申上ベク候、目出度カシク
尚々時カフ折角御イトイアラセラレ候様存上候、メデ度カシク

柔正院様

於チカ様

桃齡院様

聰徳院様

一筆致啓上候、然バ

松榮院様事御不例ノ處、御逝去被遊候由、承知仕、驚入奉言語絶候、貴君ニモ種々

御配慮御愁傷ノ事ト奉存候、御悔可申上如此御坐候、恐惶謹言

松

御判

松 越前守様

尚々、溫泉入湯イタシ候處、手足其外江吹出物イタシ今日マデ執筆難叶、無據代筆ヲ以テ申上候、且ツ亦倉橋江モヨロシク御傳へ被下度奉願候、以上

貴札忝ク拜見イタシ候、暑中愈御清安奉賀候、然バ暑中之時御見舞被仰下、忝奉存候、當地何モ靜謐ニ御坐候、乍憚御安慮可被下候、先ハ貴答迄、早々如斯御坐候、恐惶謹言

松 薩摩

御判

松 右近將監様

尚々代筆

芳翰忝致拜見候、暑中彌御清安奉賀壽候、然バ下着暑中旁何寄之品拜受、千萬忝奉存候、此品御禮迄ニ致呈上候、且ツ小子少々手足ニ腫物イタシ、夫故執筆難叶、代筆ヲ以テ貴答申上候、尙期後便之時候、恐惶謹言

松

戸 采女正様

尙々御自愛專一奉存候以上

貴書致拜見候、暑中愈御安康奉賀壽候、小子無事下着罷在候、奴先日ヨリ可致呈書處、手ニ腫物イタシ、夫故執筆難叶、延引仕候、追快方ニハ候得共、未全快無之候間、代筆ヲ以テ貴答申上候、御仁免可被下候、先ハ貴答迄申上候、後便萬々可申上候、恐惶々々

松

御 一判

松 陸奥守様

貴書忝致拜見候、彌御清安奉賀壽候、然者先達テハ大坂御固メ被仰出、殊ニ以思召少將御昇進之由、御吹聽被仰下、恐惶至極奉存候、右御祝儀貴答旁如斯御坐候、恐惶謹言

松 薩摩

松 出羽守様

自今御自愛專一奉存候、少々吹出モノイタシ執筆難叶代筆ヲ以テ申上候段、御仁免可被下候

落丁・漏丁に對しては責任を負ひます

昭和十九年十月三十日 印刷
昭和十九年十一月五日 第一刷發行
精興社印刷(東京三六)
桂川製本

島津齊彬言行錄

◎定價 八拾五錢
特別行爲税 五錢
相當額
合計 九拾錢

校訂兼發行所
東京都神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者
東京都神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

出版會承認 5290021號 10,000部

發行所
東京都神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店
會員番號三四〇〇九〇號

配給元
東京都神田區錦町二ノ九
日本出版配給株式會社

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために藝藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に開く立丸しめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産預約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に眞全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する藝藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を開かず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は預約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては際選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此事に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

982

109

47030



® Y 90

終